

あ と が き

国立特殊教育総合研究所が障害種別ごとの研究部・室体制から、国の政策課題や緊急性の高い課題に柔軟に対応するため横断的な組織体制に再編され、従前、研究室ごとに日常的、基盤的に行ってきた「一般研究」から、チームを組み課題解決に向けて取り組む、採択制の「課題別研究」のシステムに切り替わったのと同時に本研究はスタートしました。

折しも特殊教育から特別支援教育への転換・推進を図る流れの中で、通常の学級で学ぶ発達障害等の子どもへの支援のあり方がクローズアップされる中、ことばの教室等においてもそういった子どもへの対応が大きな話題になっていたところでした。配慮の必要な様々な子どもへの支援が工夫・検討されることは大切ですが、その中で、これまでと同様、通常の学級で学んでいる、吃音をはじめ言語のことで困り、悩んでいる子どもへの指導・支援についても、着実に研究を継続していく必要性を感じていたところでもありました。

本研究の論点は、吃音のある子どもが吃音と、自己と向き合い、自己とのつきあい方を学び考えること、自己を肯定的に捉えること等を支えるための実践のありようでしたが、吃音と向き合う、直面するということは、吃音ではなくても、人が自らのコンプレックス等といかに向き合うかという意味において、全ての人に通じる課題でもあります。もちろん直接的には吃音のある子どもの指導・支援に寄与することが本研究の目的・役割ですが、吃音ではない人、あるいは身近には吃音の子どもがいない先生方にとっても、自己を見つめ、子どもとの関わりを見つめる一助となれば幸いです。本研究にご協力いただいた皆様に改めて深く感謝申し上げる次第です。

研究期間中、何度か、所内研究分担者、研究協力者、研究協力機関の代表協力者が集い、研究協議会をもちました。それを通して相互理解が図られ絆も強まったように思います。本報告書をお読みいただいておりますが、吃音がテーマであるだけに、自らが吃音者の方も何人かご参加いただきました。今、こうして研究報告書をまとめることができたことに安堵すると同時に、ひとまずこの仲間が解散することへの名残惜しさも感じているところです。しかし、今後も、どのような形であれ、吃音をはじめ言語に障害のある子ども（人）及びその指導・支援をめぐる課題がある限り、地道な努力を続けていく所存です。

平成19年3月

牧野泰美